

自アレルギー 鼻アレルギー Allergic rhinitis Frontier フロンティア

FOREFRONT

最新の傾向と対策についてのアンケート調査&座談会
通年性アレルギー性鼻炎への対応

2019.8
Vol.19
No.2

池田耳鼻いんこう科 院

池田浩己

池田耳鼻いんこう科 院長

取材 &
インタビュー

池田耳鼻いんこう科は、和歌山で100年以上にわたり継承されてきた歴史ある耳鼻咽喉科医院です。近隣住民から寄せられる信頼は厚く、高齢者から子どもまで、日々多くの患者さんで溢れかえっています。現在は、3代目となる池田昌生先生と、4代目院長を継承した池田浩己先生の2人体制で診療を行っていますが、浩己先生は、古巣の日本赤十字社和歌山医療センターで鼻内視鏡手術のスペシャリストとして後進の育成も行っていきます。今回は、医院と地域の基幹病院という異なる環境で診療を続ける4代目院長の池田浩己先生に、耳鼻咽喉科診療の実際やおもしろさ、今後の展望についてお話を伺いました。

100年以上の歴史を継承し、4代目に就任

当院は、私の曾祖父であり、日本赤十字社和歌山支部病院耳鼻科部長であった池田昌克が、和歌山市に「池田耳鼻咽喉科」を開業したことから始まります。今から100年以上前、1911年(明治45年)のことです。その後、祖父の壽一が後を継ぎ、壽一の長男である父の昌生が3代目となったのを機に「池田耳鼻いんこう科」に改称、2008年に現在地に移転し、2015年からは私が4代目を継承して院長に就任しています。

かつての耳鼻咽喉科は、中耳炎と副鼻腔炎が診療の柱で、治療の選択肢は洗浄か外科的治療に限られていました。父が医師になった頃もアレルギー性鼻炎は、まだ非感染性の感冒と診断されていたようですが、1960年代の免疫グロブリンE(immunoglobulin E: IgE)やスギ花粉症の発見以降、薬物療法が発展し、耳鼻咽喉科領域の疾患構造や治療法は大きく変化していきます。

そんななか、私は4代目として特に継承を意識することはありませんでしたが、幼少期から『ブラック・ジャック』を読み、人とは違うことに目を向ける外科医になりたいと考えていました。そして、大学進学の際には、自然と耳鼻咽喉科に関心を寄せるようになります。ちょうどCCDカメラを用いた内視鏡手術が行われはじめた頃です。

関西医科大学卒業後、耳鼻咽喉科医局に入局すると、私は久保伸夫先生の下で慢性副鼻腔炎やアレルギー性鼻炎に対する内視鏡手術に明け暮れる日々を送りました。その後、大阪北通信病院、大阪府済生会泉尾病院、関西医科大学附

属男山病院(当時)での勤務を経て、2001年に日本赤十字社和歌山医療センター(以下、日赤)に赴任すると、当時の日赤には内視鏡手術は導入されていなかったため、私をはじめ内視鏡手術を手がけることになりました。

新医院建築を機に

ハード、ソフトともに新しい視点を

日赤に在籍中も、いずれ開業後は父と一緒に診療を行うことを想定し、新医院建築の準備を進めていました。前医院は廊下に患者さんが溢れかえる混雑ぶりでしたが、狭いなりに導線はよかったため、新医院でもそこを活かしながら、さらにバリアフリーの導入と、患者さんの癒しとなる「隠れ家的」な空間を目指しました。

また、新医院は4車線幹線道路に面しており、かなりの交通量があるため、騒音と車が行き来する光景を遮る目的で中庭をつくり、患者さんに中庭の樹木や木漏れ日を楽しんでもらえるよう工夫しました。

完成した新医院の外観は、単色で片流れ屋根のおよそ医院には見えないユニークな形状です。幹線道路沿いによくあるビルボード建築(大きな看板が顔になっているような建築)を避けたため、今でもカフェと間違えて入ってくる人もいます。

新医院建築を機に電子カルテも導入、父の過去1年間の紙カルテから病名登録を行い、父がクリック、ダブルクリック、ドラッグの3操作のみで入力ができるようカスタマイズしました。

こうしたハード面での改善と同時に、スタッフの意識改革にも努めました。現在、当院の診療を支えているのは看護師2名(常勤・非常勤各1名)、助手3名、事務5名のスタッフです。そのうち6名は父の代からのスタッフです。

ミーティング時にヒヤリ・ハット報告をしてもらい、スタッフ全員で情報共有するよう努めています。コミュニケーションも円滑になり、院内で起こっていることを全員が常に把握していることを理想としています。

耳鼻咽喉科診療ならではの面白さ、できること

私は現在、父の協力を得て、非常勤で週2.5日、日赤で外来と鼻内視鏡手術を担当しています。医院と病院の両方で診療を手がけるなか、環境の違いに戸惑うこともあります。

また、同じアレルギー疾患でも喘息、アトピー性皮膚炎は薬物療法のみに対応となりますが、アレルギー性鼻炎には外科的治療があり、5年前からは舌下免疫療法も加わりました。アレルギー性鼻炎では、「鼻が詰まって眠れない」、「喉が痛い」といった患者さんの訴えを重視し、時間のある患者さんは舌下免疫療法、多忙で鼻が曲がっていれば外科的治療、高齢者ならば経皮吸収型製剤で経過をみるなど、患者さんによって対応や治療ゴールを工夫できる点もおもしろいです。

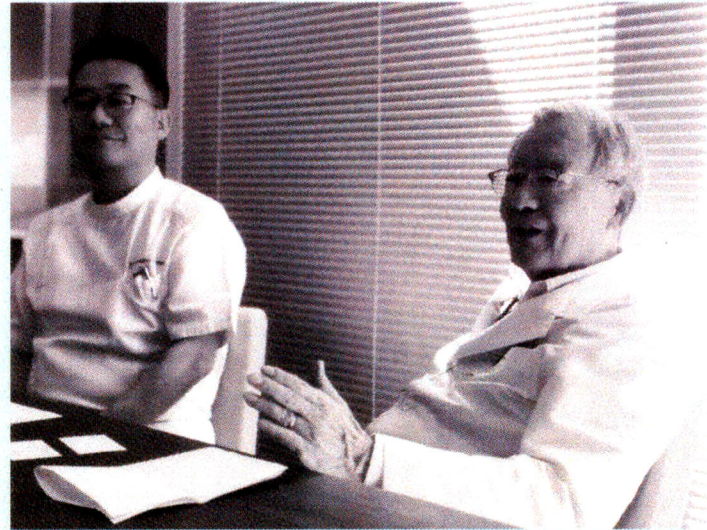
ただし、開業医ができることは一定の診療レベルまでで、そこから先は地域において信頼できる連携先との関係づくりが欠かせません。

私は日赤時代、好酸球性副鼻腔炎の診断基準となったJESREC study¹⁾にも参加させていただきましたが、鼻内視鏡手術を行うにはバックグラウンドとして嚴重な喘息の管理が欠かせません。そこで現在、喘息を合併する患者さんは市内の中西呼吸器内科クリニックと渡辺内科に紹介しているほか、治療に難渋する患者さんや腫瘍性病変は日赤に紹介しています。

また、当院で手がけていない画像診断については、2年前から日赤のオンライン画像検査予約システムが利用可能となったため、このシステムを積極的に活用し、より精度の高い診療の実現に役立てています。

父の姿を見て思う真のエビデンスとは

開業して父とともに診療を行うようになり、世代間で治療方針が大きく違うことを実感する毎日です。患者さんへの説明ひとつとってもポイントが異なりますが、受けた医学教育が違うので、そこはお互い譲れないところかもしれ



3代目院長の池田昌生先生(右)と、4代目院長を継承した池田浩己先生(左)。

ません。

ただ、私は父のふとした「何か違う」という勘の働きには敬服しています。たとえば、首が腫れていても頸部リンパ節炎なら当院で対応しますが、悪性リンパ腫であれば日赤や医大に紹介をします。そういった見極めに、医学書に書かれていない、論理的に表現できない父の勘がよく働くのです。

父は15年ほど前、ファイバースコープで検査中、患者さんが突然意識消失し、救急搬送して最終診断が腎破裂であったケースを経験しています。父はキシロカインショックと考え医事紛争も覚悟したようですが、麻酔科教授は、むしろ当院で倒れたことが救命につながったと説明して下さり、患者さんからも深く感謝されたそうです。

さまざまな局面を乗り越えた父だからこそ、画像や検査結果に異常はなくても、「何か違う」と察知できるのではないのでしょうか。今はとにかく根拠に基づく医学(evidence-based medicine: EBM)がものをいう時代ですが、父の勘は、過去の症例の積み重ねの上に成り立つ1種のEBMだと思っています。

医療はシグモイドカーブの世界ですが、閾値がどこに設定されても、われわれは治らない分布の人たちをどう治療するかを考えないといけません。その閾値は医師によって異なるはずですが、父のような経験豊富な医師なら、自ずと閾値は上がると思います。

私も、父のように医療のシグモイドカーブを上げるため、日々患者さんの話に耳を傾けています。開業医だからこそできる、この毎日の積み重ねが自分の医師としての力につ

日々の仕事にやりがいを見つけ、「継続」のために今日の自分より少しでも進化した明日の自分を目指します。



ながっていると実感しています。

「継続は力なり」で、今後の医療をより良いものに

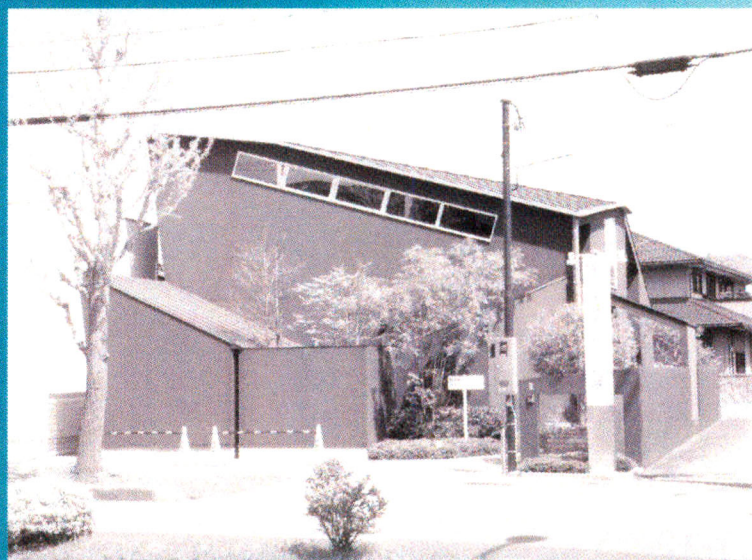
これからの医療は、AIやICTなど、テクノロジーによる変革が進むと期待されますが、それらに加えて私は、父が培った勘がものをいう医療、日々の診療の積み重ねが身を結ぶような医療も、次世代の先生方に引き継いで欲しいと思っています。

新しい技術を使いこなしながらも、先輩の先生方の知恵や経験を尊重するような医療こそが、次の世代にマッチし、脈々と引き継がれていくのではないかと思います。

そして私自身も、長年培った鼻内視鏡手術やアレルギー診療のスキルを日赤の若い先生方に継承しつつ、地元では多くの患者さんと向き合いながら、私の座右の銘である「継続は力なり」の通りにますます診療のレベルアップを目指したいと思います。

Reference

1) 藤枝重治, 坂下雅文, 徳永貴広, 他. 好酸球性副鼻腔炎診療ガイドライン (JESREC Study). 日耳鼻. 2015; 118: 728-735.



施設DATA

池田耳鼻いんこう科院

・理事長：池田昌生

・院長：池田浩己

・所在地：〒641-0055

和歌山市和歌川町9-39

・電話：073-446-1487